

分析家の自己／分析家としての自己 システム論的精神分析の視点

The Self of an Analyst/The Self as an Analyst: Aspects of System-Methodological Psychoanalysis

十川幸司

Kaifu Tsugawa

I
分析家であるということはどういうことだろうか、また分析家であり続けることはどういうことだろうか——このような問いはある患者のセッションが終わり、次の患者を待っている合間などに執拗に私に襲いかかってくる。精神科医として働いているときは、私自身、このような問いに苛ませられることはまったく言っていないほどでない。もちろんこれは、治療がうまくいっているかどうかということとは別の問題である。治療が難航し、この患者をどう理解し、どのように治療を進めていけばいいのかと考え悩むことは、日

常茶飯事のことである。だが、精神科医として何をしなければならぬかということはある程度自明なことであり、私自身の精神科医としてのアイデンティティが揺らぐことはない。ところが、分析家として働いているときに感じる問いは、この種のものではなく、私自身の職業的な基盤を揺るがすようなものである。とりわけ、あまり手こたえのないセッションが続くときや、自分の長年の試行錯誤がまったく意味がなかったのではないかと思われるような患者の反応を目の当たりにすると、徒労感を覚えるだけではなく、私はここで何をしているのだろうか、私は何をすべきなのだろうかという茫然とした不安と苛立ちにも似た焦りをも感じるのである。

分析家になる、ということはどういうことか——この問いに對して制度的な側面から答えるのは難しいことではない。どのような分析家も二つの過程を経て職業的な分析家になる。その第一の過程は養成分析である。養成分析を経験することによって、分析家の志願者は自分自身の病理から、精神分析に関する知を学ぶ。この過程において、彼（女）は自身が持つ問題について隅々まで認識し、さらにそこから自らが「治療」という生きた経験をする。フロイトは、分析家が徹底的に分析されていることが、分析家になるための条件であると考えた。しかし実際、分析家が自らの病理から完全に解放されるということは稀なことであろう。養成分析を終了した後も、分析家の志願者はそれぞれ固有の問題を抱えたまま実際の分析治療を行なっている。これはしばしば患者に対する強烈な逆転移を引き起こす原因ともなりうる。

第二の過程は、分析家の志願者が実際に患者と関わるなかで、精神分析実践に関する知を学んでいく訓練課程である。この過程において中心となるのはスーパーヴィジョン

という制度である。スーパーヴィジョンで扱うのは、原則的には分析家自身の病理についてはなく、分析家が患者と関わる際の観察の視点や、患者の病理に対する分析家の知の盲点などである。分析家は治療中、患者の病理に巻き込まれているために、患者に対する明確な視点を失いがちである。スーパーヴィジョンでは、当の治療において第三者の立場にある分析家（スーパーヴィザー）が、分析家の観察の視点やその盲点となっている局面をも含め、メタレヴェルの観点から治療過程全体についての新たな視点を提示する。分析家は、治療をスーパーヴィザーと「共に」行うことによって、自らの分析行為に対するメタレヴェルの視点を獲得する¹⁾。さらにまた異なった患者に対しては、別のスーパーヴィザーと共同作業を行なうことによって、分析家は観察の視点の拡大と複数の考え方を身につけるようになる。

このような二つの過程を経て、既成の分析協会の資格を獲得するならば、二応制度的な意味での分析家になったと言えることができる。では、分析家であることは何か、分析